考古学研究会第 69 回総会・研究集会

京都の土師器製作者は作り方を教えたのか？

—12・13 世紀に起きた京都系土師器の東日本への拡散について—

大阪大学・日本学術振興会特別研究員　舘内魁生　Kai TATEUCHI　kai.tateuchitohoku@gmail.com

Introduction

・12 世紀中ころから 13 世紀にかけて、東日本で京都の
　土師器皿と似た作り方の土器（**京都系土師器**）が出現する。
→京都と地方の交流（都鄙交流）、京都文化の地方伝播
→担い手は武士か？　平泉や鎌倉で多量に出土

⇔京都の土師器製作者の関与に諸説あり
　地方に移動し生産　or　伝習　or　土器の情報のみが動く
→京都系土師器拡散の歴史的評価を難しくしている。

Materials and Methods

・**製作技術の比較**
　特定の痕跡に注目するのではなく、製作時の一連の動作の復元を目指す。今回は各段階の痕跡をピックアップする。
・**非視覚的属性の比較**
　「持った感じ」に直結する器壁の厚さを比較する。

　京都および関東～東北の土師器 1215 点を観察
　なるべく出現率を定量的に把握

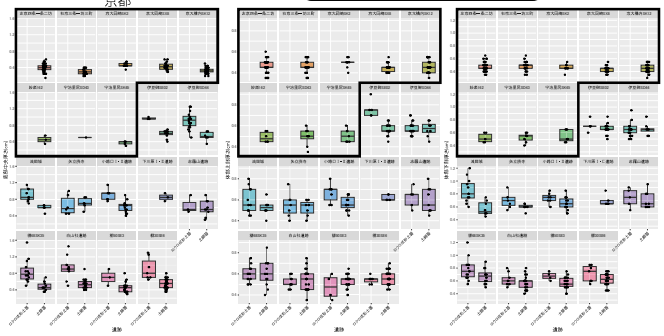
Results

		観察した点数 その字口 皿	小皿	糠小皿	内折れ	皿成形方法 type1	type2	小皿成形方法 type1	type2	体部の成形方法 コテ当て	内底の調整 工具によるナデ	指・皮等によるナデ	口縁部の調整 工具によるナデ
京都	左京四条一坊二町	51	42	0	10	○	○	○	○	×	○ (3)	○ (66)	○ (14)
	右京三条一坊二町	27	12	0	3		○	○		×	×	○ (13)	○ (1)
	京大岡崎SK2	16	21	0	1	○	○	○		×	×	○ (17)	○ (1)
	京大岡崎SX8	27	53	0	2	○	○	○		×	○ (13)	○ (42)	×
	京大構内SK12	41	[illegible]	0	0	○	○	○	○	×	○ (2)	○ (24)	○ (1)
	内裏前SD41A	7	4	11	0		○	○		×	○ (2)	○ (3)	○ (2)
	内裏前SE176下	7	9	0	1	○			○	×	×	○ (10)	○ (1)
	内裏前SE288上	6	6	0	1		○			×	×	○ (4)	×
	内裏前SD345下	9	10	0	0		○			×	×	○ (13)	×
宇治	妙楽162	10	6	2	1		○	○		×	○ (2)	○ (7)	×
	宇治神楽田遺跡	1	1	1	1	○				×	○ (1)		×
	宇治里尻SE25	4	7	1	1	観察できる接合なし				×	○ (1)	○ (6)	×
	宇治里尻SD43	12	15	1	2	○			○	×	×	○ (5)	×
	宇治里尻SK45	12	23	2	1		○	○		×	×	○ (13)	×
伊豆	伊豆御SE02	36	30	0	0		○	○		×	○ (21)	○ (16)	×
	伊豆御SD44	14	4	0	0	観察できる接合なし				×	○ (2)	○ (3)	×
北東北	浪岡城	14	37	0	2		○	○	○	○ (3)	×	○ (34)	○ (4)
	矢立廃寺	8	14	0	0		○	○	○	○ (5)	○ (7)	○ (14)	○ (8)
	小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡	16	16	0	2	○	○			×	○ (1)	○ (14)	○ (5)
	下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡	10	15	0	0		○			×	×	○ (17)	○ (4)
平泉	志羅山遺跡	23	13	0	0			○		×	○ (5)	○ (21)	×
	柳68SK35	12	5	0	0		○			×	○ (1)	○ (10)	×
	白山社遺跡	39	57	0	0	○	○	○	○	○ (2)	○ (5)	○ (48)	○ (4)
	柳50SE3	39	11	0	0	○	○	○	○	×	○ (2)	○ (23)	○ (3)
	柳28SE4	63	8	0	0	○	○	未観察		○ (5)	○ (16)	○ (22)	○ (5)
	柳30SE6	38	42	0	5	○	○	○	○	○ (3)	○ (14)	○ (31)	○ (5)
	柳52SE8（袖）	76	1	0	0	○	○	未観察		○ (1)	○ (10)	○ (34)	×
南東北	新神社遺跡	19	6	0	0					○ (1)	○ (1)	○ (1)	×
	大里遺跡	6	53	0	0		○	○	○		×	○ (19)	○ (3)

器壁の厚さ（皿）

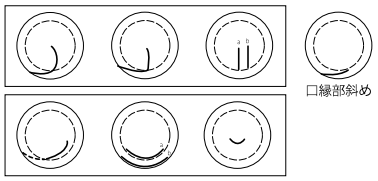
・どの部位も京都が薄手
・東日本の体部厚は同時期（共伴）のロクロ成形土器に近いものが多い

京都



底部中央の厚さ　器高の 1/3 地点（口縁部近く）の厚さ　器高の 2/3 地点（底部近く）の厚さ

成形の痕跡　※各タイプの割合は別紙参照

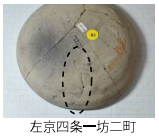


※底部を上にして見た図　黒線が接合痕

口縁部斜め

平泉白山社遺跡

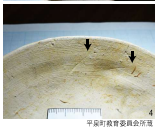
平泉柳之御所跡 28SE4



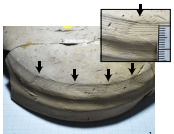
左京四条一坊二町

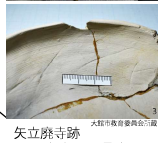
器面に残る痕跡

浪岡城跡　1：口縁部の工具痕
2：内面の”コテ当て”

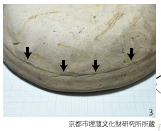


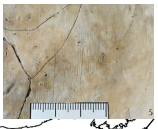
平泉
1：口縁部の工具痕
2：内底の工具痕
3・4：内面の”コテ当て”



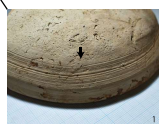


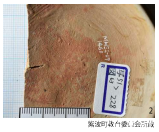
矢立廃寺跡
1：口縁部の工具痕
2：内底の工具痕
3：内面の”コテ当て”





京都
1：口縁部のナデ
2・3：口縁部の工具痕
4：内底のナデ
5：内底の工具痕





小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡
1：口縁部の工具痕
2：内底のナデ

伊豆御所之内遺跡 SE02
1：内底の工具痕
2：口縁部ナデ

Discussion and Conclusion

・**成形痕跡**
　京都でも東日本でも共通している
➔ 非視覚的な技術の**一致**

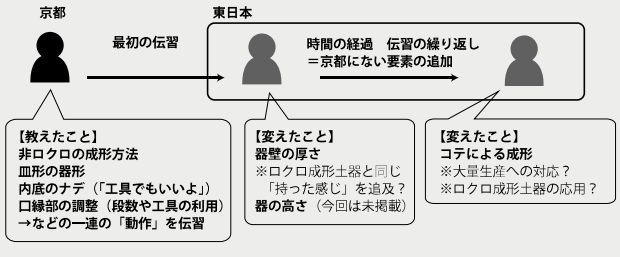
・**体部の成形方法**
　東北でのみ“コテ当て”がある
➔ 東北**独自**　やや遅れて出現
　ロクロ成形土器の影響か？

・**内底の調整**
　工具ないし皮ナデ
　東日本では目が粗い工具を利用
➔ 工具の差異
　ナデの方向や順序は**一致**

・**口縁部の調整**
　基本は皮や布によるナデ　一部、工具を利用して、回転させながら調整
➔ 土器を持った状態で
　回転しつつ撫でる動作や
　工具の使い方が**一致**

・**器壁の厚さ**
　東日本の方が厚手　ロクロ成形土器と共通する
➔ 「持った感じ」の差異
　伝統的なロクロ成形土器に合わせた意図的な**改変**か？

京都の製作者からの**体系的な伝習があった可能性○**



京都系土師器の導入は、東日本への瓦・陶器生産などの波及と時期的に重なり、京都文化の積極的な移入の一環に位置づけられる。
導入に際して**本格的に京都の土師器生産を模倣しようとした。**
京都との差異は、在地のロクロ成形土器の「持った感じ」との融合、量産のための独自の工夫と評価できるか。

Reference：池谷初恵 2018「中世初頭の東国の京都系かわらけにみる技術の導入と変容」『国立歴史民俗博物館　研究報告』210　pp.9-27
伊野近富 1998「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』13　pp.3-12
舘内魁生 2022「京都系土師器をめぐる「動き」「感覚」の復元」『考古学ジャーナル』755　pp.33-37
中井淳史 2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
橋本久和 1987「中世土器研究の製作技法ノート（1）日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』3　pp.175-183
松本建速 1995「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要』15　pp.73-84

Acknowledgments：高橋照彦氏、中井淳史氏（五十音順）
青森市教育委員会、伊豆の国市教育委員会、岩手県教育委員会、宇治市歴史まちづくり推進課、大館市大館郷土博物館、京都市埋蔵文化財研究所、京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、京都府埋蔵文化財調査研究センター、白石市教育委員会、紫波町教育委員会、平泉町教育委員会

本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業特別研究員奨励費（21J10467 および 22J30005）の成果を含む。